

学長就任にあたって

大西 昭男

キャンパスを歩きかう若者たちを見ていて、そろそろ新しいような思いに打たれることがある。二万余の学生たちのその一人ひとりの胸のうちに一つずつの世界があつて、その一つひとつの世界が行きかい、すれ違い、ぶつかり合っているのである。しかもそれらがどれ一つとしてまだ出来上がっていない世界なのであり、どんな接触から、どんなすばらしい出会いを持ち、どんなにすばらしい世界をぶつけ合つて、どんなにすばらしい星座を形成し、どんなにすばらしい宇宙を創造していくとか、はかり知れないのだ。

人は呱呱の声をあげてからしばらくの間は、ただ好き嫌いの法則に従って生きる。そしてやがて、善し悪しのけじめがつきはじめる。その後、好き嫌い、善し悪しの次元を超え、それらを包含しつつ、ともかくも世界が見えて来る。一人ずつの世界

教育段階であり、いや高等学校教育も今では大学受験という共通目標に向けて、ほぼ均一な世界像形成へと仕向けられている。

若者たちが、それぞれが世界観と確信しうるものを構築しはじめるのは、大学に入ってからである。個人差はあろうけれども、大学生となった若者たちは、既知の世界の彼方をはじめて希望の眼を放つて、何か新しい、何か未知の世界を垣間見ようとする。見物人としてでなく、傍観者としてでなく、自分もまたその登場人物の一人として、いや、その主人公として思う存

新しい世界観の創造を

像が形成されてゆく。生涯かけて発展拡大してゆくべきそれぞれの世界観の原型のようなものが形作られてゆく。

ほぼ同じような材料を与えられて、そこからほぼ同じような世界像を形成してゆくようにと用意されているといつてもよいのが小学校、中学校の義務

分に手足を伸ばし視野をひろげ、自分自身の望みのままに振る舞える世界を見つけ出そうとする。

大学とは、若者がやがてその後の生涯において見出す世界の原型であり、やがて存分に演出し演技し完成すべきドラマの原型である。大学という時空の持つ意味の重さがここにある。

大学も社会の内なる存在であるとはよく言われることである。一面においてそれはその通りである。しかし、大学が大学であるゆえんは、社会内に在りつつ、社会外に超え出ているところにある。大学がそのように自負し豪語しうるのは何故か。

それは混沌として自己を形成しつつある若者たちの世界であるからだ。そしてまた、未だ何の用に供しうるかさだかならぬような観念や、技術や、思想が、ここに渦巻いているからなのだ。これは学生としてここに在る若者たちだけのことではない。その若者たちと共に学び共に教え合うことをなりわいとし、使命としている教職員のこともである。

出来上がったもの、既成のものは大学には無縁であり不要である。時々刻々生まれつつあるもの、形成されつつあるものこそがここでは価値ありとされねばならぬ。

大学とは、何か新しい価値の見出されるべきところである。創造されるべきところである。そして何が生まれる為には、何かと何かがつかり合わねばならない。鏘然と火花を発しなればならぬ。一方から他方へと、そこにあるものが手渡されるところでは決してない。

学長にひきつづき五選されて、覚悟の一端を述べるはずのところ、以上は「顧みて他を言う」のそしりを免れないかもしれない。大学というものに、とりわけてもわが関西大学に寄せる私の熱い思いを、学生諸君にも、同僚諸兄姉にも、汲みとっていただきたい。

今年、かつて学究として、また学長として不朽の名を残された故岩崎卯一先生御生誕百年に当たる。その岩崎先生が関西大学に入学して来た若者たちにお与えになったお言葉を、現在の学生諸君に私の熱い思いを添えてもう一度差し上げたい。

「書を求めよ、友を求めよ、師を求めよ」と。

願わくはわが関西大学を、いついつまでも若人にとって、またわれら生涯学徒にとつて、知を求めるとよく、情に触れるによく、意を養うによき学園であらしめたい。

HEADLINE

- 2 面 岩崎卯一先生生誕百年
- 4・5 面 学園祭 燃えたぞ
- 6 面 カヌー 砂漠をゆく
- 8 面 特集 銀幕に魅せられて

千里眼

今年も学園祭が終わった。学園祭といえど、何となくハイライトは後夜祭。私自身、初めて目にした後夜祭の盛り上がりよう、放散される巨大なエネルギーに圧倒されてしまった▼段々細かにはみ出し、夫婦坂、大学院第一学舎、簡文館へと浸透する人また人の大洪水。ゴロという地鳴りのような声。モスラをたたき潰さんとするかのような大きな拍手の渦。ロック・コンサートのそれかと見まがうたちノリ。いやあ、段々煙でよかったです。仮説スタンドやたらつづられて▼隣へまた隣へと移るキャンドルの火闇夜の中の炎の揺れが、一つまた一つと増える。遠目に見ると、TDLのエレクトリカル・パレードを上回る▼やがて悲しきは裏の常。興奮さめやらで、雷声はり上げ街へくり出す者多し。築地のマクドにも似た数十体の泥酔者。しっぺとせよと抱き起こされ、かかえられたりかつがれたり、舞台から退場する。残るは空の酒瓶、缶ビール、五色の菓子袋、新聞など、大量のゴミの山▼学園祭は終わった。さあてみなさん、あの膨大なエネルギーを今度は何に使用しますか。まさかあの時に、いつさいがっさい蕩尽してしまったというのではないでしょうね。(K・S)



関大のこの名物イベントと、週間
の第二十九回「スポーツ」を
が、今回から新たな実施され
たバドミントン大会の決勝戦
十一月十六日、を最後に全
全日程を終了した。

学園祭がスナジで剣
道、柔道大会、昨から三
日、水泳大会など、競
技にわたり熱戦が繰り広げ
れた。

また、毎年人気高いフ
ットボール会の準決勝戦、
が、今年月か使用可能
な高松校地の第 一、第
グラウンドで十二月十四
日、

なお、各種目の成績は次の
とおり。

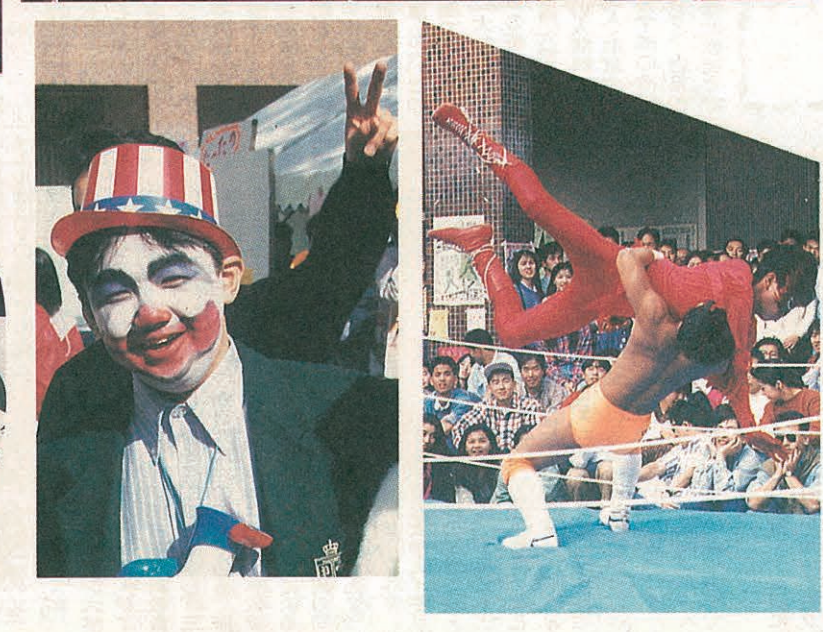
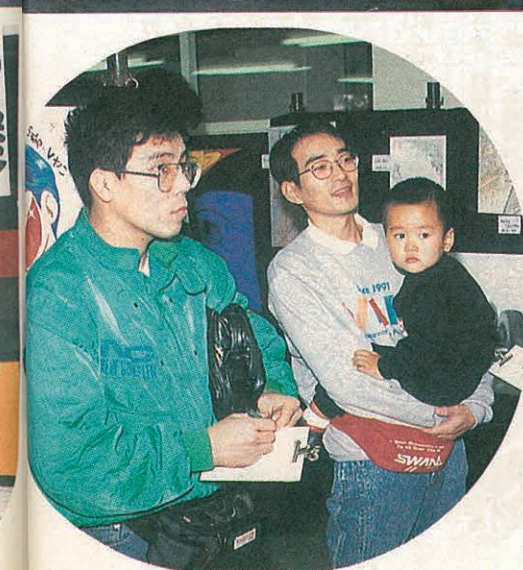
▼卓球大会(抽元) 工 二
二(田) 三(山) 三(山)
本戦文(経)四(バ)スケット
ボール大会①イース アス
レック②レラなかな
怖くないおっちゃん(判)

高槻グラウンドで ソフトボール大会

第22回スポーツ週間(第1部)

野、船舶、大はもの③樫太
④子⑤スシダヒビク
⑥子⑦キンダラ⑧子⑨森
田川添⑩ソフトボール会
⑪子⑫ハルエイ⑬山手サ
ニス⑭子⑮ウエ⑯子⑰
ドミニオン大会、男子①菊
池部、女子②関義範、女
子③武居宏実、女子④文
子⑤古川賀美、文三⑥
矢崎義雄、法三⑦田歩、商
三⑧水泳大会ハタフサ
イ⑨中井剛、商⑩都康
行、工二⑪関義範、文二⑫
八背貴子⑬西宮弘社⑭
⑮野健(経三)⑯山田郎
⑰子⑱平泳⑲中、中剛
⑳田二㉑野村恵安(経三)
㉒面近晃敏、法二⑳自由
形①野辺和臣、文二②近
藤隆生、工二③池田秀昭、経
三④平泳⑤金貴受賞⑥
ドレセクシ、金貴受賞⑦関
大キススキ⑧同好会⑨泳ハ
ンダー、ラー⑩自由形リレ
ゲル部チーム

第2部は14回目
第4部のスポーツ週間、
十月十九日火、三十日
土の両日、天六体育館で
開催された。
今回で十四目を迎えたの
に限らず、本館で行うもの
に事実は、長時間の制約の
下、例年以上に種目に戦
が繰り広げられ、快い汗をか
いた。なお、各種目の優勝
チームは次とおり。
①バレーボール大会、準硬
式部②バレーボール③バス
ケットボール大会④フン
ダー、フリー⑤自由形リレ
ゲル部チーム



— 後夜祭に一言 —

11月2日から5日まで行われた第1部の学園祭は、連日好天にめぐまれ、大きな賑わいをみせた。何大名物夜祭祭は毎年大きな盛り上がりを見せるが、泥酔者の多さなどで問題となっている。今年は、実行委員会が事前に夜祭祭に関する注意文書を作成し、学生に配布するなどの努力が一定の効果を奏したのか、昨年よりも泥酔者の数は減少したようにみえる。しかし、依然として数人少くこのまわりがない。また今年は、夜祭祭での落取りのために、前日より正門前で学生が徹夜するという事態が新たに発生した。これらは、吹田市民、とりわけ周辺住民に多大な迷惑をかけることになった。学生諸君が多夜祭を真に「自分達の祭」と誇るならば、自分で自分の首を絞めるようなことはやめてもらいたい。来年はもっと安全で華ある夜祭祭となるよう、知恵を出し合うことを希望する。

(学生部)

銀幕に魅せられて

特集

二年前から始まったこの企画、今号で一応終わることになりました。そこで今回は各学部一人、計六人の先生方に、これぞと思われる印象に残ったフィルムを一つあげていただくことにし、そのフィルムの思い出について語っていただきます。選ばれたフィルムはバラエティーに富み、その印象についても興味深

放射能に汚染された二〇一九年の地球。既に見切りをつけて他の惑星に移住していく人々と、今なお執拗に生まれ故郷の星にしがみついている人々と人類は二分されている。元ブレッドランナーのデッカーもそんな居残り組の一人である。物語は、デッカーがその腕を見込まれ半ば強制的に第一線に復帰させられるところから始まる。

『ブレッドランナー』
1982年アメリカ映画 監督 リドリー・スコット
主演 ハリソン・フォード ルトガー・ハウアー



強制労働用人間が開発した精巧無比な人造人間のことである。彼らレプリカントはあらゆる点で人間以上に優れた能力を持ち、感情さえも有しているのに、人工的な生命体であるがため何一つ権利を認められず、その寿命もただの四年と限られた悲劇的存在なのである。

酸性雨の降りしきる暗い未来のロサンゼルスで舞台にデッカーと逃亡レプリカントたちの繰り広げる息詰まる追跡劇がこの映画の見所であるけれども、レプリカントたちの悲哀に焦点を当てる

「魅せられた映画」はたくさんある。精神病院の窓を破ってチーフが朝日に向かって走るラストシーンが印象的なジャック・ニコルソン主演「カッコーの巣の上で」。しやれた会話とアイアン・キーの愛らしいトレシー・ハイドのバレーシーンは若者の心を強く揺さぶった。ストーリーは boy-meets-girl の典型で何が面白い。小さな恋が芽生えて二人は結婚したいと言いが、親は幼い子供の戯言と一笑に付す。二人はトロッコに乗って草原の中をどきどきと走り続けるのであ

た。ピージーズの歌声が流れ

『小さな恋のメロディ』
1970年アメリカ映画 監督 ワリス・フセイン
主演 マーク・レスター トレシー・ハイド



“When I was small and Christmas trees were tall, we used to love while others used to play. Don't ask me why the time has passed us by. Someone else moved in far away...”
ストーリーのわりに歌は哀感が漂っている。皆さんはピージーズといえばロックと結び付けられるが昔はこんな歌も作っていた。ミックジャガーの「パフォーマンス」をプロデュースしたパットナムならでは作品である。
(商学部助教授・須田 幸)

少し前になるが、今春封切られ、ごく最近までロングランしていた映画「レナードの朝」を観た。時々、映画に限らずテレビのドラマやドキュメンタリーでも、出演者のセリフから自分の人生を振り返ることがある。特にノンフィクションでは、そのインパクトは強く、原作者が英国人の精神科医である本映画もその例外ではなかった。

彼は微笑みながら医師の撮るビデオカメラに向かって語る。「君はどこか遠くへ、長い間旅をしていったんだ」と言われました。——今、戻ってきました」

『レナードの朝』
1990年アメリカ映画 監督 ベニー・マーシャル
主演 ロビン・ウィリアムズ ロバート・デ・ニーロ



突然の目覚めに戸惑いながらも精一杯生きる姿は見る者の心を打つ。また彼は咳く。「生きてることが、どんなに

素晴らしいことかかってことを、みんな忘れてると思うんだ」この一言に自問せざるを得なかった。もしかすると我々健康者は、生きることに素晴らしさを忘れていたのではなかろうか。

『モロッコ』
1931年アメリカ映画 監督 ジョセフ・フォン・スタンバーク
主演 ジョー・クーパー マレーネ・ディートリヒ



この映画のラスト・シーンは特に印象が深かった。明日の命も知らぬ捕縛作戦に外人部隊が出発する。軍隊から少し離れたところに奇妙な人びとがいた。身のまわりの荷物を背負った女たちである。この現地妻や慰安婦など

の女性集団の中に白人のアメリカ人もいた。砂漠で足をとられたアメリカ人はハイヒールを脱ぎすて軍隊のあとを追う。ところで、昨年の湾岸戦争で地上戦が始まる頃、大きなニュースが流れてきた。フランスの外人部隊に日本の若者が参加していたのである。その時、私は戦前に見た「モロッコ」を思い出した。

いものがあります。これからは日も短くなり、室内で過ごす時が多くなりますが、学生諸君も映画館に足を運ぶなり、あるいはテレビやビデオを利用するなりして、深く印象に残るフィルムを見つけて、長い夜を楽しく過ごす一つの方法かも知れません。

「戒厳令」などで知られるコスタ・ガブラスが、ハリウッドに進出して撮った作品で、一九九〇年度のベルリン映画祭のグランプリを獲得した問題作である。

『ミュージックボックス』
1989年アメリカ映画 監督 コスタ・ガブラス
主演 ジェシカ・ラング



ラスロの市民権を剥奪しハンガリーに強制送還しようとする米政府と対決することになる。

フランスでは、政治をテーマにとりながらあまりに面白く映画を作るので通俗的だと批判されてきたガブラスだが、サスペンスたふりに相変わず観客をくいとこの法廷ドラマにひきずりこんでゆく。父ははたして告発されているミシユカなのか。父の無罪を証明すべく、娘はハンガリーに飛ぶ。娘がそこで見たものは、父の隠された秘密であった。その鍵となる、

残された古いミュージックボックス(オルゴール)。親子の愛憎を軸に、職業的良心から父を告発する娘を描くこの映画は、われわれ法律家に、また戦後世代に重い問いを残して終わる。「後になって過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにはまいりません」という有名な「荒野の四〇年」の演説を連想させるラストである。時には辛口の映画をと思われている方は、ビデオが出てくるので是非ご覧下さい。法学部学生は、必見。

この映画のラストシーンで、親父(三國連太郎)は東京で買ったFAXを携えて雪積もる山村の誰もない家に帰ってくる。だが、彼の大きな図体は人間的な感情で充実訪ねてきた親父に響く可憐な娘を紹介する場面である。息子の恋人(和久井映美)との対面をきっかけに、親父と息子(永瀬正敏)の気持ちと息子の必要なんだ、この人が必要なんだ。俺たちは幸福の象徴である。妻に先立たれた親父は岩手のふるさとで一人を生きることを選んだ。予期に反して、親父は反対だが、東京の若い二人からの便り「よし分かった、今度は俺らがFAXで届くかぎり、老が聞く番だ」と言

『息子』
1991年製作 監督 山田 洋次
主演 三國連太郎 永瀬 正敏 和久井映美



「あんなあ、本当にこの子の嫁になつてくれるんですか」と尋ねる。標準語をハッキリしゃべれば、彼女は口の動かし方から相手の言葉を理解できるのだが、岩手なまりの親父の質問を彼女はすぐに理解できず、当惑の表情を浮かべる。息子が「東京弁でしゃべろ」と注文する。親父が努力して、同じ質問を繰り返す。娘が「さういふこと、大きくなすく。父と息子というまことにやっかいな関係で、心がうまく通じた至福の瞬間である。」(経済学部助教授・若森章孝)